

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

## スクリーンでロンドンの演劇を 3

狩野良規\*

「スクリーンでロンドンの演劇を」その3は、2019年2月から21年1月までの2年間に日本で上映されたナショナル・シアター・ライブ (National Theatre Live, NT Live) 16本、そしてコロナ禍を機に20年4月から7月にかけてナショナル・シアター・アット・ホーム (National Theatre at Home) と銘打ち、You Tubeで無料配信された16作の中からわが国の映画館では上映されていない5本を加えて、計21本のコメントである。

2019年度のNTライブ・イン・ジャパン第1作は、NT芸術監督のルーファス・ノリスが演出、人気者ロリー・キニアが主演した『マクベス』だった。だが、ロンドンの劇評は酷評の雨あられ。へへエ、これだけぶっ叩かれると、かえって楽しみになってしまう。で、オリヴィエ劇場の大きなステージにでっかいアーチ状のスロープが登場して始まった舞台、どうやら内戦後の紛争地、血みどろで残酷なディストピアを現出させて、古典劇を現代に引き寄せようとしたらしい。デリダ先生の用語を使えば、“<sup>デコンストラクション</sup>脱構築”しなければ現代的な舞台にあらずという時代だ。辺境やエスニックな状況が好きなルーファス・ノリスらしい作品。しかし残念ながら、戦争によってシェイクスピアの詩まで殺してしまったかのよう。ことばに無関心すぎる。そうになると、どんなに大仕掛けのセットを組んでも客席との親密性が失われないはずのオリヴィエ劇場の空間が、

---

\* 青山学院大学国際政治経済学部教授

なんとも空疎に見えてくる。これはダメ！ <sup>ロンドン</sup> 倫敦の激辛の批評に、アーメン (=I agree with you.) と唱えざるを得なかった。

アメリカの不条理演劇の代表作、エドワード・オールビーの『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』（1962年初演）の舞台は、ジェームズ・マクドナルド演出でウエストエンドのハロルド・ピンター劇場からの中継。舞台風景は“21世紀化”されておらず、1960年代を思わせる古風な室内セットで、落ち着ける。いや、芝居は三流の大学助教授と、奥さんは学長の娘、その欲求不満が溜まりに溜まった中年夫婦が酔っ払って3時間以上ひたすら罵声を浴びせ合う、落ち着けない作品。そんな惨状、下手くそな俳優が演じたら、すぐに飽きてしまうものだが、今や脂の乗り切ったイメルダ・スタウトンが日ごろの鬱憤をぶちまけ、夫役のコンレス・ヒルが上手に受ける。夫婦の愛憎、そう、愛にはもれなく憎しみがついてくる。ふと気がつくと、僕も結婚して40年近く、その長い年月を1晩の物語にギュッと凝縮し、大酒飲んで言いたい放題言えるとしたら——こうなるかもしれない。どこが不条理?! 実に平凡な夫婦の内面劇に思えてくる。ブルッ。

80歳を前にした御大イアン・マッケランが、これで <sup>シェイクスピア</sup> 沙翁劇の大役はお仕舞いと語ったとかで、デューク・オブ・ヨークス劇場の『リア王』は連日大盛況。僕もやっと切符を手に入れてなんとか観劇、帰国後NTライブでもう一度見た。二度とも楽しんだことは楽しんだ。マッケランは文句なし。でも、若きジョナサン・マンビィの演出は突っ込みどころ満載かな。狭い円形舞台、一階の座席を潰して花道を作り、観客席との親密感を保つ。いい感じ。現代服、照明は映画的、音楽は犯罪ドラマ風。シェイクスピア劇のこれくらいの現代化は避けられない。ケントは女優、コーディーリアは黒人。そうね、もうジェンダーや人種を云々する時代ではない。しかし、コーディーリアはお父様を心底から心配する天使というよりは、眉間に皺を寄せて戦う女性、後半は迷彩服で乗り込んでくる。う〜ん?! そして何より気に入らないのは、今日風の演出によって、人間と権力との根源的な関係を問う大時代がかった寓意劇『リア王』のスケールの大きさが感じられなくなっていることだ。あらためて、シェイクスピア

ア劇の現代化って何だろうと、考え込んでしまった。

『英国万歳!』(原題 *The Madness of George III*) は、アメリカ独立戦争に敗れて北米植民地を手放し、また精神障害を患っていたことで知られる、あまり評判のよくない国王ジョージ三世(在 1760-1820 年)の物語である。僕は 1991 年の絶賛された初演の舞台を見ている。アラン・ベネットの新作、主演は名優ナイジェル・ホーソン、そして演出ニコラス・ハイトナー、彼の出世作といえようか。今回はノッティンガム・プレイハウスの再演、演出は同劇場の芸術監督アダム・ペンフォード。NTリトルトンの初演は、割と簡素な舞台、カーテンを使って素早く場面転換し、実にスピーディな芝居だった、また国王が発作を起こしたり、回復したり、そのたびに周囲が右往左往するイギリスらしい諷刺喜劇だったと、僕の観劇メモに記されている。一方、ペンフォード版は舞台装置をしっかりと組み、しかしその転換がまたお見事。そして、喜劇俳優のマーク・ゲイティスがナイジェル・ホーソンよりきまじめに国王を演じて、あれっ。でも、そのために国王も常人と同じく、いや常人以上に心を痛めている様がジワリと伝わってきて、なるほど——と、観劇メモに綴った。

NTオリヴィエ劇場でサイモン・ゴドウィンが演出した『アントニーとクレオパトラ』。沙翁の筆になるローマの英雄将軍とエジプトの女王は、絵に描いたようなヒーロー、ヒロインにあらず。バリバリの軍人が、計算ずくの妖婦にメロメロにされる情けないお話である。レイフ・ファインズ扮するアントニーは柄シャツの前をはだけ、裸足で登場。この俳優、僕は格好よすぎておどげができないと思っていたのだが、この公演では上手に崩れている。ナイジェリア人を父にもつソフィー・オコネドーの女王は妖艶にあらず、でもチャミングで憎めない。美術もローマのハイテクの軍事作戦室、エジプトの人工池など、モダンで新鮮。ほぼ文句なし。強いていえば、広い舞台の真ん中に現れた<sup>びょう</sup>廟で演じられる終幕が、なんかチマチマしている。痴話喧嘩に明け暮れた中年の恋人たちの物語、しかしラストだけはクレオパトラが女王らしく<sup>りん</sup>凜として死んでいく見せ場なのに。それと本物の大きなヘビが登場、そのゴージャスな生ヘビに主役をかつさらわれてしまった。僕の好きなオコネドー、せっかくがんばって

いたのに。

ニコラス・ハイトナーがブリッジ・シアターで上演したアラン・ベネットの新作『アレルヤ!』は、日本ではまず作れない、僕好みの激烈なブラック・コメディである。初めチョロチョロ中パッパ、前半は国民保健サービス (National Health Service, NHS) の運営する病院を舞台に、入院している爺さん、婆さんたちがミュージカルよろしく歌や踊りまで披露してくれて、とっても楽しそう。しかし、後半は……ご存じのとおり、イギリスは戦後、「ゆりかごから墓場まで」国民の生活を保障する福祉国家になった。そのシンボルとなったのが、全国民に無償で医療サービスを提供する NHS だった。だがその体制は、1980年代にマーガレット・サッチャーが資本主義体制へ回帰すべく大きく舵を切って以来、次々と切り崩され、今や最後の砦となった NHS も効率化を叫ばれ、その存続が危ぶまれている。そんな状況の中で、病院を切り回す辣腕の看護師長がとった行動は。ラストで、看護師長とインド人の医師が語る痛烈な皮肉。日本だったら、不謹慎、暴力的、自虐的、非国民などと炎上すること必至。でも、こんな“左翼芝居”を打てる、そしてそれをゲラゲラ笑いながら楽しむ観客が大勢いるイギリスの健全さに、僕は心底から羨望を抱いている。

実験劇場のアルメイダ劇場でサイモン・ラッセル・ビールがタイトル・ロールを演じた『リチャード二世』は、既存のシェイクスピア劇を“ちゃぶ台返し”したような作品。それを斬新ざんしんと思うか、違和感を覚えるかで評価は分かれるだろう。舞台は灰色の壁に囲まれた箱型の“なにもない空間”，8人の役者は全員普段着、複数の役を演じ、出番待ちの時もずっと舞台にいる。さながら稽古場でのワークショップのよう。途中から塗料を壁にぶっかけたり。コンテンポラリーというかアヴァンギャルドというか。これ、ビールをはじめ、役者たちがうまいから成立する舞台だ。観客は『リチャード二世』という芝居を熟知しているのを前提としている。初めて見る人は辛いだろう。現代の沙翁劇はここまで来た。

オールド・ヴィク劇場のアーサー・ミラー劇『みんな我が子』は、1947年初演当時のリアリズム演劇を彷彿とさせる。『リチャード二世』の後に見ると、と

でも古風に感じられ、またわかりやすい。戦争中に欠陥部品を納品して戦闘機を墜落させてしまった工場経営者の罪がしだいに明るみに出てくる。いや、ロンドンの劇評曰く、むしろ彼の周囲がずっと彼の有罪を知っていて黙認していたことの方が、今日のトランプ大統領と有権者の関係とリンクしていてアクチュアルなんだ、と。サリー・フィールド扮する主人公の妻がラストで、「忘れるのよ、死なないで!」と叫ぶ声が痛切。演出は旅劇団ヘッドロングのジェレミー・ヘリン。

アーサー・ミラー劇と同じく往年の名作、『イヴの総て』。ただし、こちらのオリジナルはハリウッド映画である。1950年にジョゼフ・L・マンクウィッツが撮った大ヒット作は、ベティ・デイヴィス扮する大女優マーゴが自分の付き人イヴ(アン・バクスター)にスターの座を奪われる物語、野心と嫉妬と演劇人たちの人間関係を濃密に描いたブロードウェイの内幕ものだった。その昔なつかしい名画を、イヴォ・ヴァン・ホーヴェがウエストエンドのノエル・カワード劇場で舞台化した。テーマも基調も原作とさほど変わらない。あとは見せ方。オランダの人気演出家は、映像を巧みに挿入して、ライブの舞台とのハイブリッドをめざした。でも、う〜ん、彼らしいスタイリッシュな作品なんだけど、視覚的に凝った分、映画にあった泥臭い人間ドラマの要素が希薄になってしまった。ジリアン・アンダーソン(マーゴ)とリリー・ジェームズ(イヴ)も今ひとつかな。演出にも演技にもコクがなかった。

2020年は、サム・メンデス演出の『リーマン・トリロジー』で幕を開けた。これは絶品、演出にも演技にも美術にも音楽にもコクがある。今までのNTライブでベストワンを競う。2008年に倒産して世界に金融危機をもたらした、あのリーマン・ブラザーズの150年あまりの歴史を2回の休憩を挟んで、3時間半で一気に見せる。舞台は透明のガラスケースのようなワンセット、なんでもリーマン・ブラザーズの事務室を模したものとか。また役者はサイモン・ラッセル・ビール、ベン・マイルズ、アダム・ゴドリーの3人だけ。19世紀半ばにドイツから大西洋を渡った貧しい移民の三兄弟が、南部アラバマ州に小さな日用品の店を開く。3年で借金を返せる。と、最初の夢はささやかだった。だが、

綿の販売、鉄道建設への投資、ニューヨーク進出と、“アメリカン・ドリーム”を大きく膨らませていく。それを役者中心、おっさん3人だけで見せてしまう。衣裳を着替えず、声色と仕草を変えるだけで、リーマンの一族、女性、ユダヤ教のラビ、赤ん坊まで。生ピアノの演奏がちよいと情緒を添えて、ステキ。イヴォ・ヴァン・ホーヴェのように演出を前面に押し出さない。サム・メンデスは「ヴォードヴィルの気分で」と。そのとおり、スルスルッと流れるように、軽く軽く、でも資本主義社会が、そしてアメリカの夢が時代とともに変遷していく様が、走馬灯のように広がる。薄味で、しかもコクがある。良質の作品がヒットするとは限らないのが興行の世界。だが、コロナ禍でそろそろ劇場へ行くのが躊躇ちゅうちよされた時期に、異例の大ヒット。日本にも鑑賞眼のあるお客さんがたくさんいることを知ってとても嬉しかった。

一人芝居『フリーバッグ』は、ウィンダムズ劇場の観客も日本の映画館の客層も、いつもと違う。若い。舞台中央に椅子がひとつだけ、そこに座ったフィービー・ウォーラー・ブリッジがトークと仕草とマイムで、途中休憩なしの1時間20分、ロンドンのアラサーアラサーの女性の満たされぬ心情を描き出す。フリーバッグ (fieabag) とは「不愉快で薄汚い人」という意味だそうで、そんな呼び名の独身娘は、毒舌で、感情の起伏激しく、セックス大好き、家族とはうまくいかず、トラブルの山を抱え、親友に死なれ、経営するカフェは行き詰まり……下ネタもビシバシ。2013年のエディンバラ演劇祭で初演して好評、その後テレビドラマ化され、今回の舞台の再演となった。僕はフリーバッグがイケメンのカトリックの神父(アンドルー・スコット)に恋をし、猛烈にアタックするTVの第2シーズンが好き。

と、ここでコロナ禍によりロンドンの劇場は閉鎖。NTライブはそれまで映画館の大きなスクリーンで、大勢の観客と一緒に見る臨場感にこだわって、DVDを発売しなかった。テレビやパソコンの小さな画面ではダメ、と。しかし人々が外出できぬ危機に瀕して発想を転換、前述したように、2020年4月から週替わりで16週間16本のNTライブ作品を世界にYouTubeで配信した。

以下はその中から、NT ライブ・イン・ジャパンでは上映されていない5作についての寸評である。

『ジェーン・エア』は、19世紀の人気作家、シャーロット・ブロンテの同名小説(1847年)を、NTとブリストル・オールド・ヴィクが共同制作した舞台。でも、ヴィクトリア朝の長篇小説が原作、芝居も長くてかび臭そう?——と、僕はあまり期待していなかった。ところがぎっちゃん、三方を白いカーテンで囲み、木製の装置、金属製の梯子<sup>はしこ</sup>、そして生バンドが後方で演奏するアドベンチャーランドのような舞台で、孤児のジェーンが寂しい幼少期を過ごし、厳格な寄宿制学校に入り、住み込みの家庭教師となり、そこのロチェスターと恋をし、彼の狂人の妻の存在を知り、お屋敷を飛び出し、やがて彼と再会して結ばれる。そんな波瀾万丈の物語をスピーディに展開させ、場面が変わるごとにジェーンらが走る。9人の役者たちによる若々しい、疾走感あふれる芝居。「<sup>イ・ツ・ア・ガール</sup>女の子(の誕生)だわ」のセリフで始まり、終幕も同じ一句で結ぶ。フェミニズムの時代の、手垢のついていない、新鮮な舞台化作品。演出サリー・コックソン。お見逸れしました。

哀愁漂う円熟した沙翁喜劇『十二夜』は、サイモン・ゴドウィンがオリヴィエ劇場で演出すると、けっこう派手でにぎやかな当世風。役者たちの衣裳は現代服、公爵のオーシーノーはオープンカーで登場、さらに双子の兄妹セバスチャンとヴァイオラは黒人、道化のフェステは女性、おっと、いじめられ役の堅物執事マルヴォーリオも女優が演じてマルヴォーリアとな。人種や性の転換も、もうシェイクスピア現代化のお約束事となった感がある。何が今さら目新しい?!と、3幕4場の名物シーン、おかつば頭の謹厳実直なマルヴォーリアが、黄色いストッキングをはいた奇怪な姿でオリヴィア姫の前に現れる——実は、彼女は隠れレズビアンで、女主人が自分を愛していると思い込んで一気にカミングアウト、自己解放したってわけか。終幕では、<sup>だま</sup>騙されたと知って、黒髪のカツラを脱いで金髪となり、去っていく。今日<sup>きょうび</sup>日のイギリスは、ほんと、同性愛の話が好きだよな～。あゝ、現代!

ナイジェリア生まれのイニユア・エラムズの脚本をビジャン・シェイバー

ニーが演出した『バーバーショップ・クロニクルズ』（2018年、NT、フューエル、リーズ・プレイハウス共同制作）は、NTライブの上映記録にないから、今回のナショナル・シアター・アット・ホームが初上映であろう。これは掘り出し物。エラムズは若いころ、自宅近く、移民が多く住むロンドン南部ベッカムの床屋での大人たちの会話に聞き惚れたという。そこで、ロンドンだけでなく南アフリカ、ジンバブエ、ウガンダ、ナイジェリア、ガーナと、アフリカ各地の床屋とお客の雑談の様子を見せ、聞かせる。子育ての話、サッカーの試合のこと、ピジン英語、ネルソン・マンデラ、白人の女と付き合うか、それとも黒人の女がいいか、もちろん人種差別に関する議論も。オール黒人俳優、また黒人の観客がこんなに多い芝居も珍しい。彼らのすぐ目の前で、客席と同じ高さのホールでのパフォーマンス。さまざまなままりの英語が飛び交う。場面が、場所が移動する際はラップ調の音楽と踊りでにぎやかに。メッセージを強く打ち出す芝居にあらず。観客たちはよく笑っている。だが、よもやま話だからこそ、彼ら一人一人の心のうちをにじませる。アフリカといっても多種多様、“黒人”と十把一からげにしてはならないと、あらためて反省させられる。

ちょいと古い2013年の作品を蔵出ししてきたのは、『ディス・ハウスディス・ハウス』（オリヴィエ劇場、初演はコテスロー劇場）。1970年代半ばから後半、イギリスのハング・パラメント下院は労働党も保守党も単独過半数を取れない“宙吊り議会”の状態が続いた。一応労働党が政権を担っているが、法案を通すのは容易ではない。両党の院内幹事たちが必死に調整を行なう。裏工作あり、寝返りあり。階級国家イギリス、党によって人の雰囲気異なる。服装、身のこなし、話す英語も。皮肉のきいたセリフのやりとり、客席からはたびたび笑いが起こる。だが、僕の予備知識が足りないこともあって、英語字幕を頼りに見ても、よくわからん。白旗。で、終幕は1979年、労働党が政権から滑り落ち、ジャジャーン、サッチャーの演説が聞こえてくる。英国の演劇界が今でも天敵のように毛嫌いの“鉄の女”が宰相となる前夜の物語。

『レ・ブラン』は、2016年にオリヴィエ劇場で収録され、NTのアーカイブに所蔵されていた、『バーバーショップ・クロニクルズ』同様、今回が初お目見



えのアフリカものである。1965年に34歳で早世したアフリカ系アメリカ人ロ  
レイン・ハンズベリーの遺作。「レ・ブラン」とはフランス語で「白人」の意  
味。あるアフリカの国、と、あえて国名を特定せず一般化されている土地で  
の、19世紀末から20世紀初頭の植民地時代の苦境をディープに描いた物語。  
イギリスでビジネスに成功、白人女性と結婚し、今、父親を看取りに帰郷した  
チェンベ・マトセを軸に、カトリックの僧服に身を包む彼の兄、年の離れた、  
口紅をさす弟、また敵役は植民地軍の指揮官ライス少佐、さらにリベラルな白  
人の伝道師や医師たち、理想家肌だが現地の実情は今ひとつわかっていないア  
メリカ人のジャーナリストなど。チェンベの弟は、実は彼の母親がライスにレ  
イプされて産んだ子だった。そして、父は抵抗運動を主導していたらしい。ほ  
どなくチェンベも時代の流れの中に……時々舞台を、細身の、亡霊かと思う半  
裸の「<sup>ザ・ウーマン</sup>女」が無言で徘徊する。<sup>はいかい</sup>見終わると、ストーリーよりも、アフリカ  
を象徴するその黒人の女の方が記憶に残るのが、演劇つものだ。演出ヤエル・  
ファーバー。

てなわけで、自宅のパソコンでさほど緊張感なくNTライブを見はじめ、あ～  
あ、日本語の字幕も付いてないし、どうせ寝ちゃうだろうなあと思っていたら、  
あにはからんや集中力が3時間もった、最後まで見てしまったということが何  
度もあった。これは、少なくとも僕にとっては驚嘆に値する。むろん映像技術  
や画質の進歩もあろうが、それ以上にコンテンツの違いを見せつけられた。た  
いへん失礼ながら、日本の芝居とはレベルが違う！ これまでは、小さなスク  
リーンでNTライブを——いや、一般の映画も含めて——鑑賞するのは“邪道”  
だと思っていたが、考えが変わった。と、そんなことを書いている間にも、NT  
ライブの有料配信が始まった(2020年12月より)。はて、これから先どこまで、  
どういう方向に進むのやら。

2020年6月、NTライブ・イン・ジャパンはなんとか再開。がんばれ、NT  
ライブ！

ジャマイカ系移民二世のアンドレア・レヴィ原作、ルーファス・ノリス演出

の『スモール・アイランド』は、レヴィの両親たちの世代の物語。『バーバー・ショップ・クロニクルズ』、『レ・ブラン』をアーカイブから引っ張り出してきたノリスは、『マクベス』よりもこういうエスニック系の芝居を期待されて芸術監督になったのだろう。第二次大戦中、イギリスはヒトラーを倒すために、世界中の植民地から協力を得た。その見返りに戦後、なべて大英帝国の<sup>ブリティッシュ・エンパイア</sup>臣民<sup>サブジェクト</sup>たちを本国に迎え入れた。この作品はジャマイカからの移民第一世代の悪戦苦闘記であると同時に、その時代の白人たちと有色人種たちの出会いの物語ともいえる。戦争には勝っても、食糧は不足し、日常生活の困窮は続く。なんだ、敗戦後の日本と変わらないじゃないか。そこへ肌の色の違う異人種が入ってきた。NHSが目当てでやって来たんだろう、自分の国にいても外国みたいだと、英国の庶民たちに素朴な本音を言わせる。「いつジャングルに帰るんだ?」、すると「あなたの女房と寝たらな」と返す危ないセリフに、へへエ、場内から大拍手。芝居は「差別をなくせキャンペーン」のような説教臭さが漂いはじめると、とたんにつまらなくなる。移民の受け入れはどうある「べき」かではない、入れると当然こうなるよねってあたりが描かれないう。終幕は女から女へ、白人から黒人へ赤ん坊が渡されて、これからの社会へのメッセージが託される。差別撤廃のスローガンを何百回聞くよりも、この作品を見る方がよほど、移民たちに「がんばれよ～」とエールを送りたくなる。

沙翁劇『夏の夜の夢』は、ご存じのとおり、何でもありのにぎやかな喜劇。しかも、ニコラス・ハイトナーのブリッジ・シアターの芝居だ。観客の半分はプロムナードで立ち見。どこが舞台でどこが客席やら。劇団の看板俳優オリヴァー・クリスがアテネ公爵シーシェウスと妖精の王オーベロンを演じ、公爵の婚約者ヒポリタと妖精の女王タイテーニアはグウェンドリン・クリスティが扮する一人二役。俳優たちが次々と宙吊りになる。かつてピーター・ブルックは巨大なピンクの羽毛にタイテーニアを乗せ、エイドリアン・ノーブルはピンクの傘を使った。さて、ハイトナーは？ と、なにっ、ベッド。ただし、惚れ薬をかけられて空中を浮遊するのは、タイテーニアではなくオーベロンに変更。妖精バックの魔法でロバにされるボトムは、おっ、『バーバー・ショップ・クロニ

クルズ』で4役を忙しく演じていたハメド・アニメーションじゃないか。この黒人俳優、なんかズレている、いつもアンサンブルにはまりきらない。だから、とぼけたボトムにはピッタリ。黒い顔にかわいいロバの耳だけつけたキュートなボトムを、女王ならぬ妖精の王が熱愛する。はいはい、同性愛ね、イギリスだから、現代だから、そしてハイトナーもカミングアウトしている人だし。5幕で劇中劇を演じるアテネの職人たちは男女、異人種入り交じっての混成チーム。盛りだくさんの芝居で、でも消化不良になっていないのは、さすが御大。

古典劇も、それから僕が若いころには現代劇といわれ、今や“スタンダード”と呼ばれるようになった作品も、21世紀風に“現代化”されることしばしばのロンドンの演劇に、僕はいささか食傷気味。そんな脱構築疲れの僕にとって、ホッと一息つけたのがオールド・ヴィク劇場でマシュー・ウォーチャスが演出した『プレゼント・ラフター』だった。両大戦間、さらに戦後期に、俳優・劇作・演出・制作など、なんでもマルチにこなした希代の演劇人ノエル・カワードの軽やかでシャレた喜劇である。アンドルー・スコット扮するスター俳優ギャリーを中心とした、男女の駆け引きのドタバタ。洗練されたセリフ、よくもこれだけ込み入らせたなどと思わせる人物たちの入退場の激しさ、騒々しい中にポロッとこぼれる本音、人間心理の摩訶不思議。ギャリーの友人夫婦の性を入れ替え、おゝ、そうするとまた同性愛の話か。やれやれ。でも、カワードもまだカミングアウトできない時代に生きた、そっち系の人だった。もし今、彼がこの作品を書けば、こうなったかもしれないってか。

フランスの人気芝居『シラノ・ド・ベルジュラック』である。17世紀の実在の剣客にして詩人だったシラノは大きな鼻がコンプレックスで、愛するロクサーヌに自分の気持ちを告白できない。そこに現れた美青年だが口下手なクリスチャンもロクサーヌに恋い焦がれているのを知り、彼のために一肌脱ぐことにするが……19世紀末、すでに戯曲が散文で書かれはじめた時期に、エドモン・ロスタンが狂い咲きのようにロマンティックな韻文で綴り、以来世界中で繰り返し上演されてきた大ヒット作である。僕はジェラルド・ドパルデューが醜い主人公を演じた、ちょいと古臭い同名映画(1990年)が好きだ。さて、ジェイミー・

ロイド演出のロンドン版は——あれれ、また壊しちゃったの。シラノはラップで詩を語り、ロクサーヌは黒人の現代っ子、それに主演のジェームズ・マカヴォイはイケメンで、鼻も大きくない。一応、外見より内実(=詩)の方が大切だあという原作のテーマは押さえているが。現代に引き寄せるべくデコンストラクトした舞台は、一所懸命ついで行こうと無理している自分に気づかされて、僕はともしんどい。

『ハンサード』は元俳優のサイモン・ウッズの劇作家デビュー作。新作なのに、リアルで古風で落ち着ける。時代設定は1988年のサッチャー政権下、彼女を支える保守党議員(アレックス・ジェニングズ)と彼の妻(リンジー・ダンカン)が、コッツウォルド——ロンドン北方、イギリス人がこよなく愛する田舎の村々が点在する地域——の自宅で舌戦を繰り広げる二人芝居。夫はイートン校とオックスフォード大を卒業した典型的な上流階級、妻はリベラルな思想をもつ教養人。劇評曰く、コッツウォルド版『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』。でも、不条理演劇というわけではなく、終盤になると息子の日記が“議事録”<sup>ハンサード</sup>になっていて、同性愛も絡み、ほほう、そういう風に結んだか。新味はもともと左寄りのロンドンの演劇界で、サッチャーの言い分も存分に語らせている。今日のイギリスは保守党政権になって、ますます格差社会となり、EU離脱もあり、それでも選挙をすれば保守党が勝ってしまう。国論二分、イデオロギー混迷。それを体現した議論劇といえようか。

以上、ここ2年分のNTライブ作品を紹介した。当然のことながら、いろいろな芝居がある。旧作を21世紀風に脱構築した前衛劇、ジェンダーや人種を意識した配役、いや意識しないことをめざす作品、新作なのにかえてオーソドックスな会話劇、現代的テーマを真っ向から扱う舞台、はたまた古典の中に内在している“現代”をあぶり出そうとする芝居など。演劇史は直線的に進むわけではない。良質な作品が生まれると、その傾向の公演が後に続く。それまで脇にあったものが中央に躍り<sup>おど</sup>出てくる。むろん揺り戻しもある。そんな綱引きが常であって、何年か何10年かの間に攻守が微妙に入れ替わっていたりする。

商業ベースで考えれば売れそうもない作品も含め、ロンドンの最先端の芝居

をあれこれ輸入して、字幕付きで見せてくれるナショナル・シアター・ライブ・イン・ジャパンからは、目が離せない。この寸評集も続かざるを得ない。とりあえず、2020年度までの一席は、このへんで。 (2021年3月 脱稿)

[NT Live in Japan: TOHO CINEMAS]

2019年

1. 『マクベス』(2月): *Macbeth*, NT Olivier 2018, 作W.シェイクスピア, 演出ルーファス・ノリス, 出演ロリー・キニア, アン・マリー・ダフ
2. 『ヴァージニア・ウルフなんかこわくない』(3月): *Who's Afraid of Virginia Woolf?*, Harold Pinter Theatre 2017, 作エドワード・オールビー, 演出ジェームズ・マクドナルド, 出演イメルダ・スタウトン, コンレス・ヒル, ルーク・トレッドハウエイ
3. 『リア王』(4月): *King Lear*, Duke of York's 2018 (初演チチェスター・フェスティバル劇場 2017), 作W.シェイクスピア, 演出ジョナサン・マンビイ, 出演イアン・マッケラン, ダニー・ウェップ, シニード・キューザック
4. 『英国万歳!』(5月): *The Madness of George III*, Nottingham Playhouse 2018, 作アラン・ベネット, 演出アダム・ベンフォード, 出演マーク・ゲイティス, エイドリアン・スカーボロー, デブラ・ジレット, ニコラス・ビショップ
5. 『アントニーとクレオパトラ』(6月): *Antony & Cleopatra*, NT Olivier 2018, 作W.シェイクスピア, 演出サイモン・ゴドウィン, 出演レイフ・ファインズ, ソフィー・オコネドー, ティム・マクマラン, タンジ・カシム
6. 『アレルヤ!』(7月): *Allelujah!*, Bridge Theatre 2018, 作アラン・ベネット, 演出ニコラス・ハイトナー, 出演サミュエル・バーネット, サシャ・ダワン, デボラ・フィンドレー
7. 『リチャード二世』(9月): *Richard II*, Almeida Theatre 2019 (初演 2018),

- 作 W. シェイクスピア, 演出ジョー・ヒル・ギビンズ, 出演サイモン・ラッセル・ビール, レオ・ビル, サスキア・リーヴズ, ジョゼフ・マイデル
8. 『みんな我が子』(10月): *All My Sons*, The Old Vic 2019, 作アーサー・ミラー, 演出ジェレミー・ヘリン, 出演ビル・ブルマン, サリー・フィールド, コリン・モーガン, ジェナ・コールマン
9. 『イヴの総て』(11月): *All About Eve*, Noël Coward Theatre 2019, 脚本ジョゼフ・L・マンキウィッツ, 演出イヴォ・ヴァン・ホーヴェ, 出演ジリアン・アンダーソン, リリー・ジェームズ, モニカ・ドーラン

## 2020年

1. 『リーマン・トリロジー』(2月): *The Lehman Trilogy*, Piccadilly Theatre 2019 (初演 NT Lyttelton 2018), 作ステファノ・マッシーニ, 翻案ベン・パワ, 演出サム・メンデス, 出演サイモン・ラッセル・ビール, ベン・マイルズ, アダム・ゴドリー
2. 『フリーバッグ』(3月): *Fleabag*, Wyndham's Theatre 2019, 作・出演フィービー・ウォーラー・ブリッジ, 演出ヴィッキー・ジョーンズ
3. 『スモール・アイランド』(6月): *Small Island*, NT Olivier 2019, 原作アンドレア・レヴィ, 演出ルーファス・ノリス, 出演リア・ハーヴェイ, エイズリング・ロスタス, ガーシュウィン・ユースタシュ・ジュニア
4. 『夏の夜の夢』(7月): *A Midsummer Night's Dream*, Bridge Theatre 2019, 作 W. シェイクスピア, 演出ニコラス・ハイトナー, 出演オリヴァー・クリス, ゲンドリン・クリステイ, ハメド・アニマシヨーン
5. 『プレゼント・ラフター』(10月): *Present Laughter*, The Old Vic 2019, 作ノエル・カワード, 演出マシュー・ウォーチャス, 出演アンドルー・スコット, インディラ・ヴァルマ
6. 『シラノ・ド・ベルジュラック』(12月): *Cyrano de Bergerac*, Playhouse Theatre 2020 (初演 2019), 作エドモン・ロスタン, 演出ジェイミー・ロイド, 出演ジェームズ・マカヴォイ, トム・エデン

7. 『ハンサード』(2021年1月): *Hansard*, NT Lyttelton 2019, 作サイモン・ウッズ, 演出サイモン・ゴドウィン, 出演アレックス・ジェニングズ, リンジー・ダンカン

**National Theatre at Home** (2020年4月-7月, You Tubeにて無料配信)

1. 『一人の男と二人の主人』: 4/2 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
2. 『ジェーン・エア』: 4/9 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間  
*Jane Eyre*, NT Lyttelton 2015, NT & Bristol Old Vic, 原作シャーロット・ブロンテ, 演出サリー・コックソン, 出演マデリン・ウォーラル
3. 『宝島』: 4/16 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
4. 『十二夜』: 4/23 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間  
*Twelfth Night*, NT Olivier 2017, 作W.シェイクスピア, 演出サイモン・ゴドウィン, 出演フィービー・フォックス, オリヴァー・クリス, ティム・マクマラン, タムシン・グレイグ
5. 『フランケンシュタイン』: 4/30 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
6. 『アントニーとクレオパトラ』: 5/7 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
7. 『バーバーショップ・クロニクルズ』: 5/14 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間  
*Barber Shop Chronicles*, NT Dorfman 2018 (初演 2017), NT, Fuel and Leeds Playhouse, 脚本イニユア・エラムズ, 演出ビジャン・シェイバーニー, 出演フィサヨ・アキナデ, ハメド・アニメション, ピーター・バンコール
8. 『欲望という名の電車』: 5/21 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
9. 『ディス・ハウス』: 5/28 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間  
*This House*, NT Olivier 2013, 作ジェームズ・グラハム, 演出ジェレミー・ヘリン, 出演フィル・ダニエルズ, ジュリアン・ワダム
10. 『コリオレイナス』: 6/4 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
11. 『英国万歳!』: 6/11 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
12. 『スモール・アイランド』: 6/18 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間
13. 『夏の夜の夢』: 6/25 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間

14. 『レ・ブラン』: 7/2 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間

*Les Blancs*, NT Olivier 2016, 作ロレイン・ハンズベリー, 演出ヤエル・  
ファーバー, 出演ダニー・サバーニ

15. 『深く青い海』: 7/9 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間

16. 『アマデウス』: 7/16 (木) 19:00 [現地時間] より 1 週間